産学の人事交流に思う

戸　倉　仁一郎*

一口に産学協同というが，人事交流という点では，日本ほど産業界と学界が離れ離れになっている所は，少ないであろう．大学は卒業生を企業に提供するだけに，とどまっている．

ある企業で，非常に立派な貢献をした技術者がいた．その時，ある国立大学の工学部で，教授の空席があり，推薦されることになった．

ところが，大学からの返事は，色よいものではなかった．理由は研究報告の数が少ない，というものであった．

企業の中で，抜群の仕事をし，産業にも，社会に寄与することの大きかった技術者が，工学部の先生として，不適格であったのである．

会社では，当然のことながら，自社技術の核心については，公表したがらぬ．すぐれた技術やノウハウの，学会誌に載る機会はあるまいと思われる．逆に，余り重要でない研究の方が，発表されることが，多いのではないかと思われる．

技術系の大学こそ，産業界と積極的に人事交流をすべきだと思う．報文第一主義も，大学としては，止むを得ないことかも知れないが，技術教育者の適格者の基準を，再考して貰えまいかと思う．

上に関連して，大学では「教育に熱心な先生」，がなくなってゆくのではないかと，心配させられる．大学では研究を通じて教育する，といって了えばそれまでである．教育にいかに力をつくしても，報文の数（質に非ず）がなければ，評価されないとなると，講義の仕様も変るのではないか．魅力ある講義や実験を，学生はどれだけ待望していることだろう．

昔，Cavendish の水素発見の事実は，彼の死後10年にやっと確認された．Avogadro の仮説は，50年も埋もれていた．中国の昔には，野に遺賢をなからしめることが，帝王の理想とされた．

いまは自己を売り出す時代である．しかし，技術者というのは，そういうことは苦手である．

つまり，自己顕示のある人とない人のちがいだけでも，評価を非常にむつかしくする．だから産業界から人材を発掘することは，至難のわざなのである．

話は変るが，学界から産業界への人事異動も，問題としない．博士課程を卒えて，或は文部教官から，民間会社にはいった人は，会社のコスト意識は覚悟の前であるとしても，自分の手がけてきた課題と切り離された，といってガックリしている人が多い．

これを企業側から見れば，別に怪しむに足りないことである．大学は基礎研究，応用研究を，主としており，企業では開発研究を専ら行う．

博士というのは，「問題解決能力の高度のものを具備した人」である．すぐれた基礎研究をなしとげた人は，必ず開発研究でも手腕を発揮する筈であって，専門分野とは関係は少ない．

学士から修士，さらに博士に進むに従い，本人の学問領域が細分化していくことは，当然だが，その狭い領域がその人のレパートリーである，自分でと思うのは誤りである．ほんとうは，学際領域の未開の荒野こそが，研究のテーマである以上，基礎研究を重ねた人程，視野広く，思慮深く，また問題解決能力を発揮できる人なのである．

* 戸倉仁一郎（Niichiro TOKURA），大阪府立工業技術研究所，所長，工学博士，応用化学
大阪大学名誉教授